新市町村の横顔

結城郡
石下町

草房町長

1. 沿　革

石下町は元岡田郡に属し単に石毛といつた。延喜4年豊田郡に属し，建久元年源頼朝の追捕吏となるに及んで鎌倉の直轄となり，家臣島山三郎が管理した。当主治親の時（天文年間）その弟政重を石毛に封じた。

天正3年政重卒し，子政家幼少（7才）の時当主治親はその臣飯見大膳に殺され，そのさわぎにまぎれてその機に乗じ，下妻の城主多賀谷政経豊田氏を陥れ石毛を降し，豊田氏22世 500年の治政は亡びた。以後慶長8年まで29年間徳川氏の有に帰した。

その後慶応3年まで 265年間その諸臣の采邑するところとなつた。慶長6年石毛を石下と改称した。明治2年藩籍奉還の際は若森県に属し4年印幡県となり，6年千葉県に8年茨城県となつた。同11年石下町として町政を施行した。産業としては肥沃な土地に恵まれ，農蚕業を中心とし，かたわら機織業を営み逐年発展を遂げた。たまたま昭和28年9月1日町村合併促進法が制定されるに及び，昭和29年2月27日には石下町，3月9日には岡田村，3月13日には飯沼村，次いで豊田村と各町村合併促進協議会は相次いで結成され，玉村は種々の事情から宗道村と石下町に分村した。かくして石下町を中心として1町4カ村が昭和29年10月1日合併を完了し，理想的な農村都市としての新しい石下町が発足したのである。

2. 産　業

本町の約70％が耕地という農村地で，米，麦，大豆，野菜類の産出は極めて多い。特に東部地域は古くから穀倉といわれる豊田領内で，現在は耕地整理が施行され，中央を江連用水が流れ灌漑の便は良好である。畑地は砂質壌土が多く麦や豆作に適し，又桑の生育も良く養蚕を農家の本業又は副業として盛んに行つている。近年は余蒔胡瓜，白菜，葱等も栽培され生産高は年々増加しつつある。西部地域の蔬菜園芸は特に盛んで白菜，西瓜など産額が多く，京浜市場にその声価を高めている。なお水稲の耕作面積は1,151ヘクタール，陸稲において274ヘクタール，又麦類においては 1,011ヘクタール，実収高は水稲において5,129,114キログラム，麦類において29,716,654キログラムに達している。又前述の通り西部地域の蔬菜園芸は盛んで西瓜の年産額は実に 339万キロに及び，主として京浜方面に出荷されている。又白菜の生産数量は東部地域を加え実に 406万キロに達している。又畜産関係において自給養豚事業が取上げられ，静岡，神奈川，千葉の各県より基礎豚が相次いで導入され，最近急激に繁殖し，各地に分譲され好評を博しつつあり，正に新興養豚の町の観を呈している。又本町工業は工場数90有余を数えるがいずれも小規模で，その主なるものは機織業が58工場にして全体の60.9％を占めている。つづいて醸造業，食料品製造が15工場，その他下駄製造業，建具製造木材加工業等13工場及び金属製品，瓦製造業等でいずれも生産は上昇している。特に機織工業は地方特産物として本町工業の大半余を占めている。

昭和33年茨城県繊維工業指導所石下分所が開設され，図案，染色，生産技術，販売経営指導に当り，最近とみに回復した繊維景気と相俟つて今後一層の飛躍的進出を期待されている。

3. 教育文化

常に学校施設の拡充強化と教育内容の充実を図り，よりよい環境のもとに児童生徒達が明るく学びやすい教場とすべく努力し着々その成果を収めつつある。この町の小学校は5校で学級数が68，児童数は3,181人（男1,603女1,578）中学校5校で学級数 31，生徒数1,282（男617女665）である。（昭和34年学校基本統計調査）なおこのほど豊田小学校が本年度の当初予算で計画され去る10月1日5,248千円で落札した。校舎は6教室（木造2階建）竣工予定35年1月31日である。又公民館教育を中心として社会教育の普及を図り，青年学級，婦人学級を開設して2，3男対策や生活改善等社会情勢に対応して新らしい町造りの推進力を挙げつつある。

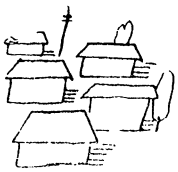
町長のことば

わが石下町は古い歴史の町であり，昔から機業の町として大衆向きのいしげ紬を産してきました。しかし町の7割は農家であり，農工商のそれぞれの構成に応じて施策を講じ，町民の福祉増進と町の発展に心がけています。町発展の基礎はなんと申しましても個々の家庭の繁栄であり，その基盤は家内の和合であり，和は建設であり，あらゆるものを生み造成すると共に人生の灯火であり，和合の家庭には不平も不満もなく，感謝の日を送る事が出来ると思考します。

昭和34年度一般会計歳入歳出予算（当初）　（単位千円）

歳入	町税	地方交付税	公営企業及び財産収入	分担金及び負担金	使用料及び手数料	国庫支出金	県支出金	寄付金	繰越金	雑収入	町債	合計
	28,053	25,993	133	393	646	5,057	1,160	905	4,500	1,490	8,000	76,330

歳出	議会費	役場費	消防費	土木費	教育費	社会及び労働施設費	保健衛生費	産業経済費	財産費	統計調査費	選挙費	公債費	諸支出金	予備費	合計
	2,030	28,869	4,121	6,593	15,574	1,286	1,042	5,895	2,639	178	621	2,143	5,039	300	76,330



◁◁ 統　計　雑　感 ▷▷

一本杉　清

私は70人の大世帯を構成する統計課の末席から日頃感じている事のうちその一つを，ここに統計雑感として申し述べてみたい。

今年も2月には，統計主事資格認定講習会が開かれるとかきいているが，これは統計職員の一人前になる一つの過程として開催される一種の洗礼ともいわれるものと考える。私も統計職員としては，もち論初年兵であるから，当然この洗礼を受けたものである。その際に感じた事を一つここに書き記すことにする。私の統計についての知識は，従来グラフを書くくらいのものしか持ち合わせていなかつたが，いよいよ統計課に来てからは，これでは心細い限りであるので，いろいろ統計についての参考書などに統計知識を求めたが，そこに見られるのは，統計の体系的な論理性とか，むずかしい理論式などばかりで，これは容易なものではないということを強く感じた。かかる時に認定講習会出席を指示されたのであるが講師などの話の中に，不要なばかりでなく，有害ではないかと感ぜられる話がある。統計は重要であるという事を話しているのであるが，その話の主としてテクニツクの問題であるが，つまり次のようなものである。

「統計に入ると下積みの，極めて地味な仕事で，蟻地獄にでも落ちたように思われ敬遠されている。しかし行政の基礎資料を作るのであるから重要なのだ」という話である。この後半の話は理解できるが，前半の敬遠されている云々について問題がある。

この話は統計主事資格認定講習会という長い表題の講習会の，第1次と第2次との双方に，その開会から閉会までの間に聞かれた言葉である。この講習会出席の受講生はいずれも統計については，白紙で臨んでいるので，統計が，敬遠されているかどうか全然解つていない者ばかりであろうと考える。私自身も，初めに申し述べたように，統計とはグラフを書くくらいの知識しかなく，書籍によつて極めて専門的技術を要するものであるとの認識を深めつつあつたので，この講習会は，内心ある種の興味を感じて臨んだものの一人である。

講習会は，統計の各分野ごとに，各々の専門家によつて講義があり，講習会を終了したが，その中で講師などのうちから前述のごとき説明がなされたのである。これによつて，統計が，統計の先輩諸賢から敬遠されているんだなという事を初めて知らされたものである。これから統計の専門的知識を，幾分なりとも修得して，利用度の高い，正しい立派な統計を作つて行きたいという意欲に対して，頭から水を浴びせているようなものではなかろうか。私は統計に入つて1年6カ月，過去の統計は知らないが，現在の統計実務のなかで，敬遠されている面に到面した事は一度もない。

統計は極めて多忙であり，極めて活動的であり，各方面からの利用度は，ますます高まる一方である。一定の固定されたカラから脱皮して，各方面の需要に応じる事の出来る統計をいかにして作成してゆくかという事は，現在の統計職員の一人一人に課せられた使命であろうと思う。

織りなされて来た歴史を基に，過去の時間より現在までのあゆみを知り，未来への歩みを推計する，ロヂカルな正確さで作られる統計は，一種の科学であり，原子力時代への導標でもある。　　（県統計課統計主事）